埋蔵文化財発掘調査概要

渡地村跡（わたんぢむらあと）

2009年3月

那覇市教育委員会

発行/那覇市教育委員会　〒900-8553　沖縄県那覇市樋川2-8-8
電話(098)891-3501

編集/那覇市教育委員会文化財課
印刷/㈱国際印刷

渡地村跡調査概要

（1）はじめに

平成18・19年度にかけて発掘調査を行った「渡地村跡」について紹介します。渡地村跡は、那覇市通堂町1丁目那覇港湾内に立地します。発掘調査は臨港那覇1号線整備に伴うもので、那覇市教育委員会が那覇港管理組合から委託を受けて実施しました。当初、遺跡の有無について不明の為、工事予定地（那覇港湾内）における試掘調査を平成17年度に実施しました。試掘調査の結果、工事予定地内に良好な状態で遺跡が残っている事が判明しました。その後、遺跡西側（カルバート）を沖縄県立埋蔵文化財センターによって平成18年2月から6月まで発掘調査が実施されました。そして、調査区の南側（18年度）と、調査区の北側（19年度）に分けて当市教育委員会が発掘調査を行いました。

沖縄は三山が対立していた時代より、中国・日本・朝鮮・東南アジア諸国との中継貿易を行っていました。『那覇』が貿易港として活発になるのは尚巴志王代の頃といわれています。『那覇』は現在のように陸続きではなく『浮島』と呼ばれた離れ小島でした。そのため、首里までの道のりは不便でしたが、1451年尚金福王により崇元寺から久茂地までの長虹堤（海中道路）が築造され、陸続きとなり『那覇』の発展の契機となりました。その一角の、『渡地』は「垣花への渡り口になっていて、山原船や、馬艦船が多く停泊していた。1700年代に硫黄城と一つの島となり、明治初年、本島に接する陸地となった。」とあります（沖縄大百科事典より）。戦前は農工倉庫・税務署・税関・旅館・床屋などが建ち並び賑わっていました。本遺跡はグスク期に始まり、1609年の薩摩侵攻後も沖縄の貿易を支える港町として戦前まで機能していました。

（2）周辺の遺跡分布について

本遺跡の周辺には、那覇港を知るうえで重要な遺跡が確認されています。湾口には16世紀中頃、和冦の防衛として屋良座森城・三重城が築造されています。湾内には、中国の使節を迎えるための迎恩亭、宮古・八重山の貢ぎ物をつかさどった宮古蔵、硫黄を貯蔵した硫黄城が立地しています。本遺跡の対岸には、琉球王府の海外貿易品を収納した公庫である御物城、造船所であるスラ所、垣花村が立地しています。また、渡地村に接して天子館・親見世・上天妃宮・下天妃宮などの遺跡がみられます。

（3）発掘調査の概要

発掘調査は約3,000㎡の範囲で実施されました。遺跡の層序は9層確認されました。大きく分けると5期に分けられます。

①グスク1期：小島の岩盤を平らに削り、平場を作った時期。遺構は削られた岩盤（9ページ下の写真）、波切り遺構（5ページ中の写真）などが検出されています。14世紀後半頃の遺物が得られています。

②グスク2期：自然堆積の砂丘が形成し護岸が設けられた時期。遺構は護岸（8ページの写真）、柱穴跡、炉跡、溝状遺構、塩田跡と思われる遺構などが検出されています。遺物は15世紀頃の青磁（11ページ下の写真）がまとまって検出された他、タカラガイ（10ページ下の写真）がまとまって検出されました。

③グスク3期：周りの岩礁を造成土で埋め立てた時期。西側の調査区で検出された遺構は、石列・石群が護岸より西に向かっており（7ページ中の写真）東から西へ埋め立てられたと考えられます。遺物は15世紀後半～16世紀頃の青磁（11ページ中の写真）がまとまって検出された他、青花も得られています。このころに屋良座森城についで、三重城の建設など、那覇港の整備が進められています。

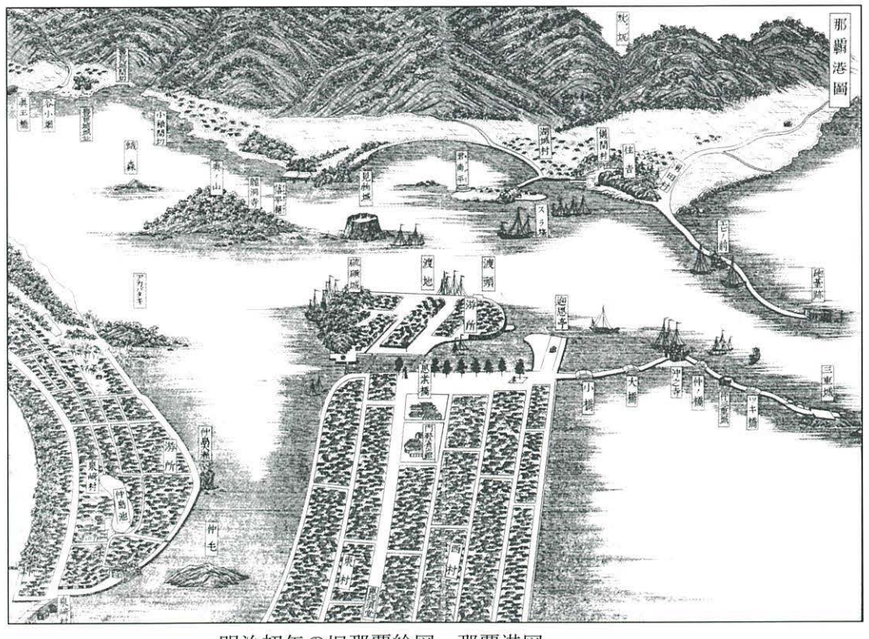
④近世琉球期：渡地村の時期。遺構は柱穴跡（6ページ下の写真）・長方形石積み遺構（9ページ上・中の写真）などが検出されています。遺物は青磁・白磁・本土産・沖縄産陶磁器が多く得られています。このころに硫黄城と一つになりました。

⑤近代期：遺構は税務署（7ページ上の写真）・農工倉庫跡などが確認され、遺物は本土産・沖縄産の陶磁器が多く得られています。農工倉庫跡は戦災による焦土に覆われており戦中の堆積と考えられます。

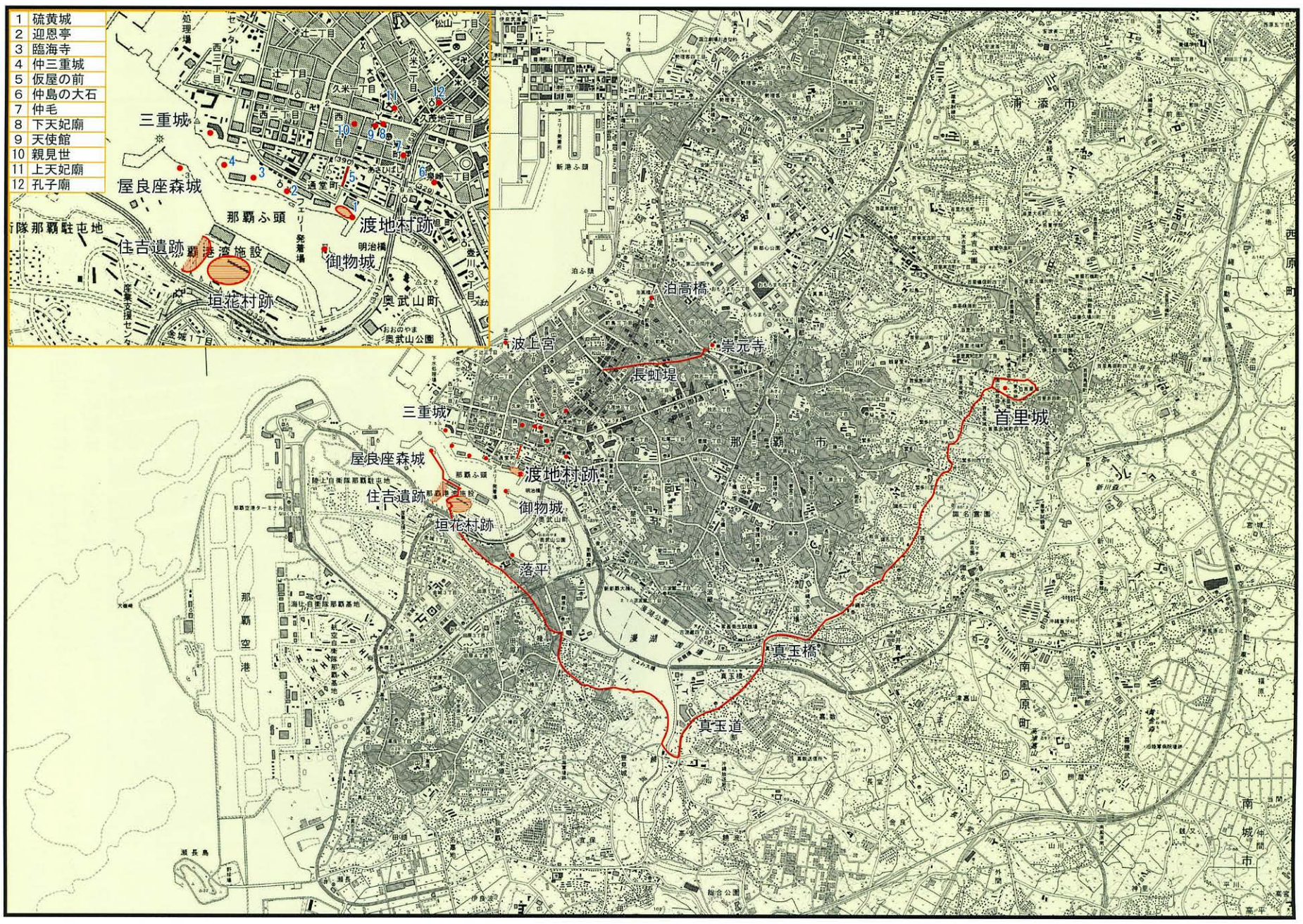
これらのことから、当地はグスク期から現代にかけて流通の拠点である国際港として発展していたことが、大量の出土遺物からもうかがえます。

（4）おわりに

以上、渡地村跡の概要について紹介しました。2007年6月16日には発掘調査区で市民対象の説明会を開催し、見学者は約300名訪れました。さらに、2008年10月末には【速報！渡地村跡出土遺物展】が開かれ、入館者が13日間で1508名訪れ、本遺跡に対しての関心の高さが伺えます。現在、発掘調査で得られた膨大な資料の整理を行っており、それらを検討し報告書にまとめる予定です。



明治初年の旧那覇絵図　那覇港図
伊地知貞馨『沖縄志』1877年（明治10）より



第1図　那覇市の位置と渡地村跡・周辺の史跡の位置　　(S≒1/50,000)

第2図　発掘調査の位置と周辺の遺跡（概略図）- - - - - 破線は明治初頭頃の海岸線　　(S≒1/6,000)

平成 18 年度
調査区俯瞰

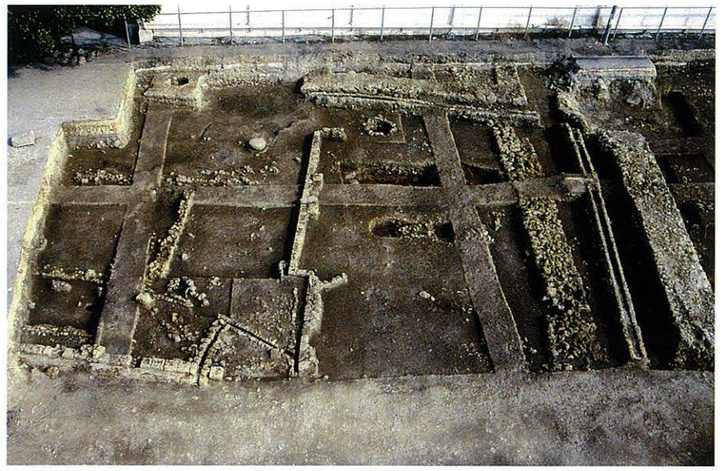
平成 18 年度
調査区近景
（東から）

平成 19 年度
調査区近景
（東から）

平成 18 年度
調査の作業状況
遺構の検出作業を行う。

平成 18 年度
調査の作業状況
遺構の検出作業と測量作業を行う。

平成 19 年度
調査の作業状況
検出した柱穴群の完掘・実測作業を行う。



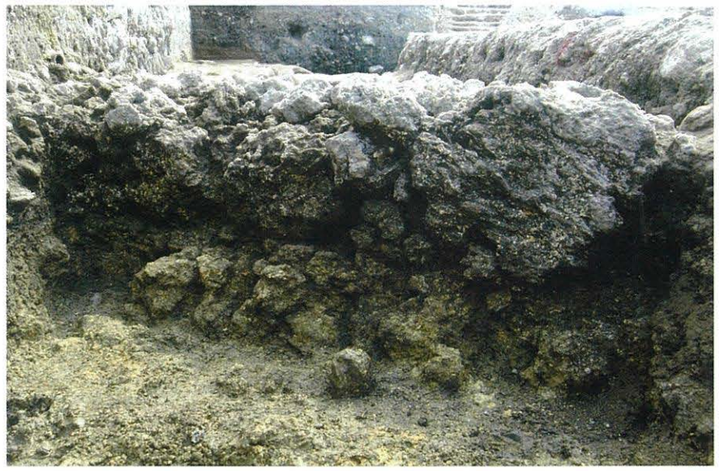
平成 19 年度
検出された遺構①
建物・側溝跡。

平成 19 年度
検出された遺構②
石が敷詰められている。

平成 19 年度
検出された遺構③
検出した遺構を測量し図面を描く。

平成 18 年度
検出された遺構④
護岸。

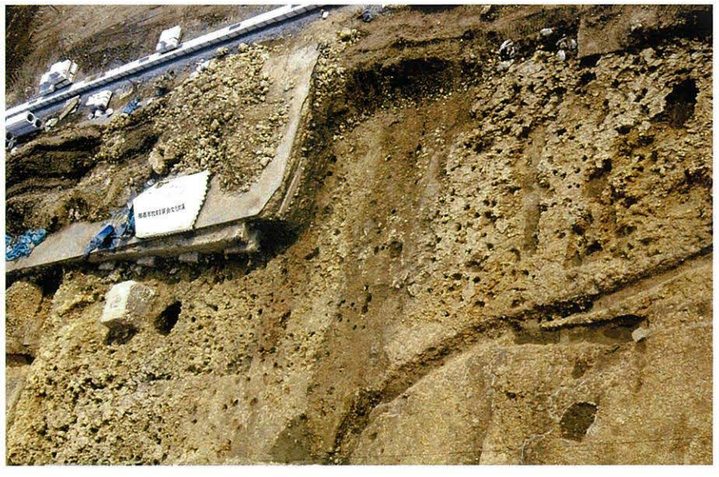
平成 18 年度
検出された遺構⑤
護岸。



平成 19 年度
検出された遺構⑥
護岸。

平成 18 年度
検出された石列遺構⑦
掘り込んだ岩盤の内側に石灰岩を積み上げた遺構。

平成 18 年度
検出された石列遺構⑦近景。



平成 19 年度
検出された遺構⑧
削られた岩盤・溝状遺構。

平成 19 年度
出土した遺物①
１個体で出土したイノシシの骨。

平成 19 年度
出土した遺物②
古銭・夜光貝蓋が集中して出土。

平成 19 年度
出土した遺物③
小型のタカラガイが集中して出土。

平成 19 年度
出土した遺物④
青磁が集中して出土。中には高麗系の瓦も数点含まれる。

平成 19 年度
出土した遺物⑤
青磁碗・皿が集中して出土。

平成 19 年度
出土した遺物⑥
青磁碗が集中して出土。

平成 19 年度
出土した遺物⑦
青磁馬上杯が完形品で出土。

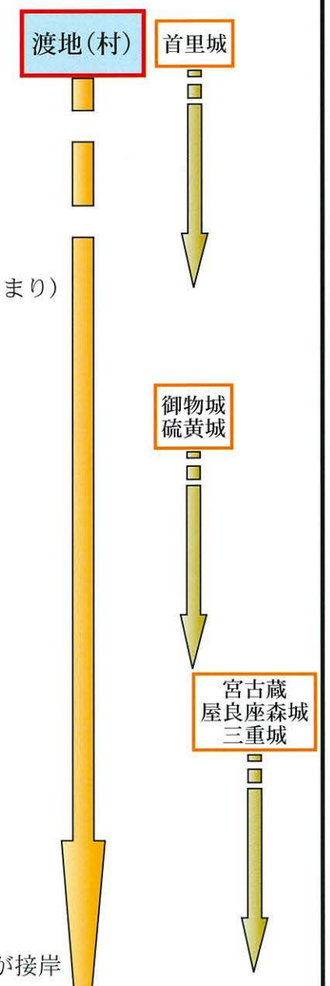
平成 19 年度出土した遺物⑧
陶磁器・獣骨片が集中して出土。

平成 18 年度
出土した遺物⑨
イノシシ？頭蓋骨・陶磁器が出土。

平成 19 年度
調査の作業風景
観察畦を丁寧に削り、地層の確認を行う。

平成 19 年度
調査の作業風景
平坦にされた岩盤を刷毛で丁寧に検出。

平成 20 年度
資料整理風景
遺物に出土地点を記入。

沖縄の主な出来事

西暦	王統	主な事柄
1187	舜天王統	舜天即位と伝わる
1260	英祖王統	英祖が即位したと伝わる
1264		久米・慶良間・伊平屋はじめて英祖に入貢と伝わる
1296		沖縄本島に元襲来という
1314～1320		このころ三山対立と伝わる
1368	察度王統	明建国
1372		中山王察度、はじめて明に入貢
1380		山南王承察度、はじめて明に入貢
1383		山北王怕尼芝、はじめて明に入貢
1389		察度、高麗と通好する
1392		中山王・山南両王、明の国子監に留学生を送る（官生のはじまり） 三十六姓、渡来と伝わる 李氏朝鮮建国
1404		冊封使がはじめて来琉する シャム船渡来して交易
1406	第一尚氏	察度王統滅び、尚思紹、中山王となる（第一尚氏）
1429		尚巴志三山統一
1451		【長虹堤】を築いて首里と那覇を陸続きにする
1458		【万国津梁の鐘】を鋳造
1470	第二尚氏	尚円（金丸）が即位
1554		倭寇を防ぐための屋良座森城竣工
1609		慶長の役。薩摩軍、琉球に侵入する
1644		清建国
1872	沖縄県	琉球藩（尚泰王）となる
1879		廃藩置県で沖縄県となる
1880～1907		那覇港（那覇埠頭）１０００トン～１５００トンの船舶が接岸可能な港湾整備が行われる
1944		米軍の空襲により那覇港湾施設破壊され使用不能となる
1945		米軍による那覇港（那覇埠頭）浚渫施工される